≪翻　　訳≫

人間の尊厳についての演説

コンコルディアの伯爵ジョヴァンニ・
ピーコ・デッラ・ミランドラ　著
佐　藤　三　夫　訳

きわめて尊敬すべき師父たち[1]よ，わたしはアラビア人の書き記したものの中に読んだのであるが，サラセン人アブダラ[2]は，いわば世界というこの舞台において，最も感嘆すべきものと見られるものは何かと尋ねられたとき，人間ほど素晴しいと見られるものは何もない，と答えた。かのヘルメース・トリスメギストスの説くところは，この意見と一致している。すなわち，「おおアスクレピオスよ，人間こそは偉大な奇跡である」[3]と。これらの説かれた言葉の理由をおもんばかるに，人間の本性の卓越せることについて多くのひとびとによってもたらされた数多くの理由は，わたしを満足させなかった。すなわち彼らの言うところによると，人間は諸被造物の仲介者であり，上位の者たちには親しき者であり，下位のものたちの王である。諸感覚の鋭敏なことによって，理性の探究によって，知性の光明によって，自然の解説者であり，確固たる永遠と流れる時間との中間者であり，（ペルシア人たちが言うように）世界のきずな，否，むしろ世界の結婚であり，ダヴィドの証言によれば[4]，天使たちよりもやや劣れるものである。これらの理由は，なるほど大いなるものではあるが，主要なものではない。すなわちそれらは，最高の感嘆の特権を，自分のものであると正当に要求しうるようなものではない。実際，なぜわれわれは，天使たち自身や天のこの上なく祝福された聖歌隊たちを，もっと感嘆しないのであろうか。ついにわたしは，なぜ人間は生きているものの中で最も幸福であり，それゆえあらゆる感嘆に価するものであるのかということ，そして，宇宙の連鎖において人間に割当てられている境遇，獣たちによってのみならず，星々や超世界的な精神たちによってもうらやまれうるかの境遇とは，まさにいかなるものであるのかということを，理解したように思われた。それは信じられぬほどの，驚くべきことである。なぜそうでないことがあろうか。なぜなら，これがために，人間は偉大なる奇蹟であり，真に感嘆すべき生きものである，と正当にも言われ評価されるのであるから。だがかかる境遇とは何であるのか，聞きたまえ師父方よ。そしてあなた方の親切さによって，わたしのこの話に好意ある耳を傾けたまえ。

すでに至高の父，建築師たる神は，秘密な知恵の法則によって，われわれの見るこの世界の住まい，神の最も聖なる神殿を建造した。彼は超天界を精神で飾り，諸天球を永遠の霊魂で活気づけ，下界の排泄されたけがれた諸部分を，あらゆる種類の動物の群れで満たした。だが仕事が仕上がると，造り主は，かくも大いなる御業の理由をおもんばかり，その美を愛し，その雄大なことを感嘆する者が，誰かいることを望まれた。それゆえ，すべての物事がなしとげられると（モイゼやティマイオス[5]が証言してい

1) ピーコが自分を向けている「師父たち」とは誰であったのか．その時代の学者たち，討論に参加しえたであろうすべてのひとびと．だがかれは，ローマ教皇庁の聖職者たち，かれが「教皇の元老院」と呼んでいる枢機卿団が，列席しうることを期待していた．それゆえ，これらの頁はかれらにも向けられている（ピニャニョーリの注）．

2) Abdala, すなわち Abd Allah. 多分，モハメッドのいとこ（フォーブズの注）．

3) *Asclepius* i. 6 (*Hermetica*, ed. W. Scott, I, 294). (Cf. Ficino : *Theologia Platonica*, XIV, 3. ——佐藤の注)

4) 『詩編』第8章，5節．

るように)，彼は最後に人間を生み出すことについて考えた。ところが，それにもとづいて新しい子孫を形づくれるようなものは，原型の中になかったし，新しい息子に相続財産として贈与しうるものは，宝庫の中になかったし，またその宇宙の観照者が坐りうる場所は，全世界の座席の中になかったのである。いまやすべてのものが充満しており，すべてのものが最高の，中間の，そして最低の諸階級に分配されてしまっていた[6]。だが，最後の生殖において，あたかも産み疲れたかのように消沈したなどというのは，父の能力にふさわしからぬことであった。慎重さに欠けるところから必要な事柄において動揺したなどというのは，彼の知恵にふさわしからぬことであった。他のものたちに関しては神の気前のよさを賞讃することになっているはずの者が，自分自身のことに関しては神の気前のよさを非難せざるをえなくさせられたなどということは，彼の慈悲ぶかい愛にふさわしからぬことであった。最も優れた造り主は，結局，他のものたちそれぞれに個々に私有されていたものはどんなものでも，かれがそれ自身に固有のものを何もあたえることができなかったその者によって共有されるべき旨，定めたもうた。そこで，造り主は人間を，不定な姿をした作品として受け取り，世界の中心に置いてこう話しかけられた。「われわれは定まった座も，固有の姿形も，おまえ自身に特有ないかなる贈物も，おおアダムよ，おまえにあたえなかった。それというのも，おまえの願い，おまえの意向にしたがって，おまえが自分で選ぶその座，その姿形，その贈物を，おまえが得て，所有せんがためである。他のものたちの限定された本性は，われわれによって規定された法の中に抑制されている。おまえは，いかなる制限によって抑制されることもなく，その手のなかにわたしがおまえを置いたおまえの自由意志にしたがって，自分自身に対して自分の本性を指定するであろう。世界のなかにあるものすべてを，いっそう都合よくおまえがそこから見まわせるように，わたしはおまえを世界の中心に置いた。われわれはおまえを，天のものとも地のものとも，死ぬべきものとも不死なるものとも，つくらなかった。それというのもおまえが，あたかも自分自身の専断的な名誉ある造り主であり形成者であるかのように，自分の選り好んだどんな姿形にでも自分自身を形づくりえんがためにである。おまえは，獣であるところのより下位のものに堕落することもできるであろうし，おまえの意向しだいでは，神的なものであるところのより上位のものに再生されることもできるであろう。」

おお，父なる神のこの上なき寛大さよ。人間のこの上なき，驚くべき幸福よ。人間には，自分の選ぶものを所有し，自分の欲するものとなるということが認められている。野獣たちは生まれるやいなや，ルキリウスの言うように[7]，自分といっしょに，かれらが所有することになるであろうものを，母の胎内からもってくる。最高の霊たちは，始めからかそのすぐ後に，かれらが永遠にあるであろうところのものとなった。御父は生まれいずる人間の中に，あらゆる種類の種子とあらゆる種類の生命の萌芽をさずけたもうた。各人が育てた種子は成長して，その果実をかれの中にもたらすであろう。もしそれらの種子が植物的であるならば，かれは植物となるであろう。もし感覚的であるならば，獣となるであろう。もし理性的であるならば，天的な動物となるであろう。もし英知的であるならば，天使や神の子となるであろう[8]。そしてもしいかなる被造物の運命にも満足せず，自分の統一の中心へと自分を取りもどすならば，神とただひとつの霊となって，すべてのものの上に置かれてある御父の孤独な闇の中で，すべてのものに優越するであろう。

5) Timae Locri *de anima mundi*, 99 d sgg. ; Plat. *Tim.* 41 b sgg. (ガレンの注)

6) Cf. Plato, *Protagoras* 321 *c* ff. (フォーブズの注)

7) Lucilius, *Satyrarum*, lib. VI (22), in Nonius Marcellus, *De compendiosa doctrina*, II ed., Lindsay, I, 109. (ガレンの注). Frag. 623 (Marx). (フォーブズの注)

8) Cf. Ficino, *Theologia Platonica*, XIV. 3. (フォーブズの注)

このわれわれのカメレオンを感嘆しない者がいようか。あるいはいったい，何か他のものをこれ以上に感嘆する者がいようか。人間のことをアテネ人のアスクレピオスが，その変貌し，自分自身をも変容する本性という証拠から，プロテウスとして秘儀の中で示されたと言ったことは，不当なことではない。こうしたことからそれらの変身は，ヘブライ人やピュタゴラス派のひとびとのもとでは有名である。実際また，ヘブライ人の最も秘密の神学は，あるときは聖なるエノクをかれらが malakh hashekhinah[9] と呼ぶ神の天使に変容させ，またあるときには他の者たちを他の神霊に変容させる[10]。そしてピュタゴラス派のひとびとは，不敬虔な徒を獣に，もしエンペドクレスを信じるなら，植物にさえも変形する[11]。そのことを真似てマホメットは，「神法より逸脱せる者は獣となる」としばしば繰り返して語ったが，まさに至当なことである。実際，植物たらしめるのは，樹皮ではなくして，無感覚で何も知覚しない本性である。駄獣たらしめるのは，皮ではなくして，無分別で感性的な魂である。天空たらしめるのは，球体ではなくして，正しい道理である。天使たらしめるのは，物体からの隔離ではなくして，霊的な知性である。すなわち，もし地を這って腹の欲にふけった者を君が見たとするならば，君の見るものは人間ではなくして，やぶである。もしさながらカリュプソによってのように，妄想のむなしい幻覚によって眩惑され，かきむしる誘惑に魅せられて感覚に身をゆだねた者を見たならば，君の見るものは人間ではなくして，獣である。もし正しい理性によってすべてのものを識別する哲学者を見るならば，君はかれを尊敬するだろう。かれは地上の動物ではなくして，天上の動物である。もし身体を意識せず，精神の奥ふかくへひきこもって，純粋に観想する者ならば，この者は地上の動物でも，天上の動物でもない。かれは人間の肉をまとった，より尊い神霊である。それゆえ人間に感嘆しない者がいったいいるだろうか。人間は旧約や新約聖書において，あるときはあらゆる肉の名称でもって呼ばれ，またあるときはあらゆる被造物の名称でもって呼ばれているが，それは不当なことではない。なぜならかれは，あらゆる肉の姿に，あらゆる被造物の性質に，自分自身を形づくり，つくりあげ，変容するからである[12]。それゆえにペルシア人エヴァンテスは，カルデアの神学を述べているところで，「人間にはいかなる自分自身の生まれながらの姿というものもあるのではなくして，多くの外来的な姿があるのだ」と書いている。そこから "Hanorish tharah sharinas," すなわち「人間は種々異なった，多様な，変化する本性をもった動物である」[13]というカルデア人のことわざが生じたのである。

だが何のためにこうしたことを思い起こすのか。われわれは，自分が存在することを望むところのものであるという条件で生まれたからには，われわれの義務は，特に次のことを配慮することであるということを，理解せんがためである。すなわちわれわれは，名誉ある存在でありながら，野獣や愚かな駄獣に似たようなものとなったことに気づかなかったなどということが，われわれについて決して言われないように配慮することである[14]。むしろ，予言者アサフの次の言葉が，われわれについて繰り返して言われるように配慮することである。すなわち，「あなたたちは神々であり，みないと高き者の息子たちである」[15]と。したがって，御父のこの上なく慈悲ぶかい寛大さに乗じて，御父がわれわれに与えた自由な選択を，われわれにとって有益なものとする代わりに，有害なものとすることのないように。われわれが凡庸なことで満足せず，最高のものを渇望して，（われわれ

9) この表現は「神の全能の天使」を意味する（ピニャニョーリの注）.
10) 『エノク書』第40章8節（ウォリスの注）.
11) Empedocles, fr. 117 (Diels).
12) 『創世記』第6章12節.『民数記』第27章16節.『マルコによる福音書』第16章15節，等.
13) この引用の出所が発見されえなかった（フォーブズの注）.
14) 『詩編』第49編21節.
15) 『詩編』第82編6節（『ヨハネによる福音書』第10章34節）.

は望めばできるのであるから）全力をあげてそれに達せんとして努めるように，ある聖なる野望をしてわれわれの霊魂を侵略せしめよ。

地上のものごとをさげすもう。天空のものを見下そう。そして最後に，この世のものはすべて軽んじて，この上なく卓越せる神に最も近い超世界的座へと飛んで行こう。そこでは，聖なる玄義が伝えるように，熾天使（セラフィム），智天使(ケルビム)，および座天使が第一の座を占めている。われわれはもはやかれらに譲歩することはできないし，第二の座ではがまんできないので，尊厳と栄光をかれらと競おう。もしわれわれがそれを望むときには，いかなることにおいても，かれらに劣ることはないであろう。

だがどのように，また結局何を，われわれは行なうべきなのか。かれらが何を行ない，どんな生活を送るのか見てみよう。もしわれわれがそのような生活を送れれば（なぜなら，われわれはそうすることができるのだから），われわれはすでにかれらの運命と等しくなったことになろう。熾天使は愛の火で燃える。智天使は知性の光輝で輝いている。座天使は判断の確固としていることによって存立している。それゆえ，もし活動的な生活に身を捧げて，より劣ったものたちの配慮を適正な検討によって引き受けるならば，われわれは座天使たちの堅固な安定性でもって強固なものとされるであろう。もし諸活動を休んで，被造物の中に造り主を，造り主の中に被造物を省察することによって，観想の閑暇の中に浸って時を過ごすならば，われわれはどこもかしこも智天使の光できらめくであろう。もし造り主御自身だけを愛によって熱望するならば，かの食いつくす火によって，われわれはたちまち燃え上がって熾天使の姿となるであろう。座天使，すなわち正しい審判者の上に，世々の審判者である神が坐したまう。智天使，すなわち観想者の上には，神が飛びたまい，さながらかれを孵化するために抱いて温めている。実際，主の霊が水の上にただよっている[16]。そしてその水は，とわたしは言うのだ，天空の上にあり，ヨブの書によれば，夜明け前の讃美歌でもって主をほめ讃えている[17]。熾天使すなわち愛する者は，神の中にあり，神はかれの中にある。否，むしろ，神とかれ自身とはただひとつのものである。

座天使たちの権能は偉大である。われわれは判断することによってそれに到達する。熾天使たちの崇高は最高である。われわれは愛することによってそれに到達する。だがひとは，知られないものをどのようにして判断したり愛したりすることができるのか。モイゼは，かれの見た神を愛した。そしてかれが観想する者として以前に山の上で見たことを，裁く者として人民に授けて課した。それゆえ，中間にある者として智天使は，かれの光でもって，われわれを熾天使的火へと準備させ，また同時に座天使たちの判断に対して照明をあたえるのである。これは最初の精神たちの結び目であり，思弁的哲学を統轄する知恵の女神パッラース的な位階である[18]。これはわれわれが見ならい，得ようと求め，しかも理解すべき最初のものである。このものからわれわれは，愛の頂上へと心を奪われてゆき，またよく教えられよく準備して行動の任務へと下ってゆく。だがもしわれわれの生活が智天使的生活を模範として形成されるべきものであるとすれば，その生活がどんなものでありどのようなものであるか，智天使たちの行動や働きがどんなものであるかを，目の前に明確にもつことは，真にそうするだけの価値のあることである。われわれは肉であり大地の事物を知るにすぎない者であるので[19]，自分自身を通じてそこに到達することはわれわれには許されていないのであるから，それらの事柄に親しく近しいがゆえに，それらについてのきわめて豊かで確実な保証をわれわれにすることのできる，古代の父祖たちの方へ近づいて行ってみよう。選ばれた器[20]，使徒パウロに，かれが第三天へ

16) 『創世紀』第1章2節.

17) 『ヨブ記』第38章7節.

18) Macrobius, *In Somnium Scipionis*, I, VI, 11 ; 54-55.

19) 『ローマ人への手紙』第8章5節.

20) 『使徒行録』第9章15節.

高められたとき，智天使たちが何を行なっているのを見たかということについて尋ねてみよう[21]。解説者ディオニュシオスによれば，かれは次のように答えるであろう。智天使たちは清められ，次いで照明され，最後に完全なものとされていた，と[22]。それゆえわれわれはまた，地上において智天使的生活にならい，道徳的科学を通じて感情の衝動を抑制し，弁証法を通じて理性の闇を追い散らし，無知と悪徳のけがれをいわば洗い流すことによって，感情が無闇に激発しないように，また理性が思慮を失っていつか錯覚しないように，霊魂を浄化しよう。

それから，よく整えられ純化された霊魂を，自然哲学の光でもって満たし，最後に神的な事柄の認識によって霊魂を完全なものとしよう。そしてわれわれの父祖たちではわれわれにとって十分でないとするならば，その姿が栄光の座に彫り刻まれて輝いている太祖ヤコブに尋ねてみよう。下界においては眠っているが，天界においては目ざめているきわめて賢明な父は，われわれに告げ知らせるであろう。だがかれは比喩を通じてこう告げるであろう（父祖たちにはすべてのことがそのような仕方で現われ出る）。すなわち，最も低い地面から天の頂へと伸びたはしごがあり，それは多くの階段の連なりによって区分されている。すなわち頂上には主が坐したまう。天使たちは観想しながら，代わる代わるそのはしごを登ったり下りたりしている[23]。

そしてもしわれわれが天使的生活を熱望して同じことをしなければならないとするならば，わたしは問うのだが，いったい誰がきたない足や不潔な手で主のはしごに触れるだろうか。秘儀が要請するように，清浄なものに触れることは不浄なものには禁じられている。だがこれらの足とは何であり，これらの手とは何のことであろうか。確かに霊魂の足は，それでもってあたかも大地の土に依拠しているかのように物質に依拠している，最もさげすむべき部分である。栄養や食物をとる力，欲情の火口（ほくち），快楽的柔弱の師のことをわたしは言っているのだ。霊魂の手をなぜ怒りの力と言わないのだろうか。この力は欲望の防御者として欲望のために戦い，略奪者として，影の下でまどろみながら欲望がむさぼるものを，塵と太陽の下で奪い取る。われわれが不浄で汚れたものとしてはしごから投げ捨てられないために，これらの手，これらの足を，すなわち言わば霊魂の首根っこをおさえている身体の誘惑[24]がその座を占めているすべての感覚的部分を，あたかも生きている川でもってのように，道徳哲学でもって洗い清めよう。だがもしわれわれがヤコブのはしごを登り下りする天使たちの仲間になりたいと望むなら，こうしたことでは十分でないであろう，もし踏み段から踏み段へと適切に前進してゆき，はしごの道からどこへも外れてゆくことなく，互いに登り下りするのを邪魔することがないように，われわれが予めよく適応させられ教育されていなかったならば。すでに智天使的精神によって活気づけられて，はしごのすなわち自然の階段を通じて哲学し，中心から中心へとすべてのものを貫通してゆきながら，話や推論の技術によってこうしたことに達したときには，われわれはある時にはオシリスのように一を多へとティタン的力で引き裂きながら下ってゆき，ある時にはオシリスの肢体のように多を一へとアポッローン的力で拾い集めながら上ってゆき，ついにははしごの上にある父のふところの中で休らいながら，神学的幸福によって完全なものとされるであろう。

また，生まれ出るよりも前に，神と生命の契約を結んだ義人ヨブに，最高の神はかれの許にいるあの何百万という者たちの中に，特に何を望んでいるのかということを，尋ねてみよう[25]。「天のいと高き所で平和を行なう者」[26]とかれの書において読まれることにしたがって，かれは確かに「平和」と答えるであろう。そして中

21) 『コリント人への第二の手紙』第12章2節.
22) Pseudo-Dionysius Areop., *Caelestis Hierarchia*, VI-VII.
23) 『創世紀』第28章12-13節.
24) Cf. *Asclepius* I, 12.
25) 『ダニエル』第7章10節（Cf.『イエレミア書』第1章5節）.
26) 『ヨブ記』第25章2節.

位の者は下位の者たちに最高位の者の訓告を説明するものであるから，神学者ヨブの言葉を哲学者エンペドクレースがわれわれに説明してくれるだろう。かれはわれわれに，われわれの霊魂の中にある二重の本性を示す。かれの詩が証言するように，争いと友愛を通じて，あるいは戦争と平和を通じて，これらの本性の中のひとつによってわれわれは天界へと高く揚げられ，もうひとつによって地獄へと突き落とされる。それらの詩の中でかれは，狂人や神々から追放された者のように争いや不和によって駆り立てられて，深淵の中へ投げ捨てられていることを，嘆いている[27]。

確かに，師父たちよ，われわれの中には沢山の不和がある。われわれは内乱よりももっと重大な内的不和を自分の中にもっている。もしわれわれがこれらの不和を望まないならば，もしわれわれが主の高位者たちの中に位置するように，自分たちを高みへと高めるあの平和を得ようと望むならば，ただ道徳哲学のみがわれわれの中におけるそれらの不和をまったく抑制し鎮めるであろう[28]。もしわれわれの人間がその敵からただ休戦を求めるとしても，先ず第一に道徳哲学は，多様な野獣のほしいままな侵略を，また獅子のけんかや怒りや衝動を，打ち砕く。その際，もしわれわれがもっと適正な方策を自分自身に講じて，永遠の平和の安全を欲するならば，それはやって来て，われわれの願望を惜しみなく満たすであろう。あたかもいけにえの雌豚のように二匹の野獣は殺されて，道徳哲学は肉体と精神との間にきわめて神聖な平和の犯しえない契約を結ぶであろう。弁証法は，修辞の矛盾と三段論法の詭弁との間で，不安になって騒いでいる理性の混乱を鎮めるであろう。自然哲学は，落ちつかない魂をさまざまな仕方で動揺させたり，分裂させたり，引き裂いたりする，意見の争いや不一致を鎮めるであろう。だが自然はヘラクレイトスによれば戦争から生まれたのであり，このためにそれはホメーロスによって争いと呼ばれているということを，われわれに思い出すことを命じるような仕方で，自然哲学はそれらを鎮めるであろう[29]。それゆえ，自然哲学において真の安息と堅固な平和がわれわれにあたえられることはありえない。こうしたことはその女主人の，すなわち至聖なる神学の，務めであり特権である。神学は道を示し，仲間としてかの女の許へ導くだろう。かの女は急いでいるわれわれを見ると，遠くから次のように大声で呼びかけるだろう，「わたしのところへやって来なさい，苦労した者たちよ。やって来れば，わたしはあなた方の元気を回復させてあげましょう。わたしのところへやって来なさい，そうすれば，世界や自然があなた方にあたえることのできない平和を，あなた方にあたえるでしょう」[30]と。

これほど優しく呼びかけられ，これほど親切に招かれて，われわれは地上のメルクリウスのように羽の生えた足でもって，いとも祝福された母に抱かれんとして飛び上がりながら，願わしい平和を享受するであろう。すなわち，至聖なる平和，不可分な結合，和合せる友愛をすべての精神の上にある一つの精神に調和するようになるのみならず，あるえも言われぬ仕方でまったく一なるものとなるであろう。これが，ピュタゴラス派の者たちが全哲学の終局目的であると言っているあの友愛である。これが，神がそのいと高き所において為したもうているあの平和である。そして，天使たちは地上へ下りながら，それを通じて人々が天に上って天使となるように，善意の人々にその平和を告げ知らせたのである[31]。この平和を，われわれは友人たちのために願おう。それをわれわれの世紀のために願おう。われわれの入るあらゆる家のために願おう。われわれの霊魂のために願おう，その平和を通じてわれわれの霊魂がそれ自身神の家となるように。そして道徳と弁証法を通じて

27) Empedocles, fr. 115. 13-14 (Diels).
28) Cf. Lucanus, *Pharsalia* I, 1.
29) Heraclitus, fr. 53 (Walzer).
30) 『マテオによる福音書』第11章28節．および『ヨハネによる福音書』第14章27節．
31) Jamblichus, *Vita Pythagoras* 230-33.『ルカによる福音書』第2章14節および第19章38節．

そのけがれを振り捨てた後，宮廷の装飾でもってのように多様な哲学でもって飾り立てられ，神学的花輪でもって戸口の頂を飾るように。こうして栄光の王が下り，御父とともに来てわれわれの霊魂の許にとどまるであろう。もしわれわれの霊魂がもてなしをする女主人として自分がそれほど大いなる価値をもつ者であることを示すならば，かれの慈悲深さは計り知れないので，結婚衣裳のような黄金の服をまとい，多様な箴言でもって取り巻かれて，立派な客を，もはや客としてではなく，決して別れることのない花むことして迎えることになるであろう。かの女（われわれの霊魂）は，身内のひとびとから解き放されることを欲し，自分の父の家や自分自身をさえも忘れて，花むこの中で生きるために自分自身の中で死ぬことを欲するであろう。その花むこの前では，その聖徒の死は確かに貴重である[32]。わたしは死と言う，もしあの生の充満が死と言われなければならないとするならば。その死の省察を賢者たちは哲学の研究であると言ったのだ[33]。

またわれわれは，きわめて聖なるえも言われぬ英知のあふれる泉——その神酒で天使たちは酔っているのだが——からほとんど縮減されることなき，モイゼ自身を引用しよう。この身体の荒涼たる孤独の中に住まうわれわれに，次のように掟を命じる尊敬すべき審判者の言うことを傾聴しよう。すなわち，今なおけがれている者として道徳を必要としている者たちは，テッサリアの祭司たちのように自分を浄めている間は，幕屋の外の戸外にいるひとびととといっしょに住むように。すでにその習性を整えたひとびとは，聖所の中へ受け入れられても，まだ聖なる事物には触れないように。まず弁証法的徒弟奉公によって，哲学の熱心な助祭として聖なる事物に仕えるように。さらに，かれらはこれらの聖なる事物に関しても容認されて，ある時は神の優れた王宮の多彩な，すなわち星を散りばめた装飾を，ある時は七つの光によって飾られた天の燭台を，またある時は皮の聖物を，哲学の司祭職において観想するように。そして最後にかれらは，神学的崇高の功徳によって神殿の奥へ入ることを許され，神のお姿との間にあるヴェールをまったく取り去って，神の栄光を享受するであろう[34]。こうしたことを確かにモイゼはわれわれに命じている。そしてそう命じながらかれは，われわれが将来の天の栄光への道を，哲学を通じてできる限り準備するよう，われわれに忠告し，刺激をあたえ，激励をあたえている。

だが本当に，ただモイゼ的なあるいはキリスト教的な秘儀のみでなく，古代人たちの神学もまた，わたしが今しがた論議したこれらの自由学芸の利益と尊厳を，われわれに示している。ギリシア人たちの秘儀において観察された秘儀を伝授された者たちの位階は，実際，他の何を意味しているであろうか。われわれが贖い的なものと言ったあの学芸，すなわち道徳と弁証法を通じて浄化されたひとびとに，初めて秘儀の受領ということが生じたのである。こうした秘儀の受領ということは，より隠秘な自然を哲学によって解釈すること以外の何でありえようか。それから最後に，このように準備されたひとびとには，かのエポプテイア[35]，すなわち神学の光を通じて神的な事物を洞察することが到来した。このような聖なる秘儀の伝授を受けることを欲しない者がいるだろうか。あらゆる人間的なものを無視し，財産を軽蔑し，身体的なものを顧みることなくして，今なお地上に暮らしていながら神々の客となることを望まない者がいるだろうか。また永遠の神酒にひたって，死すべき魂でありながら不死の贈物を授かることを望まない者がいるだろうか。プラトーンによってパイドロスの中で歌われた，あのソークラテース的熱狂[36]によって非常に鼓吹されて，ここから，すなわち邪悪の中に置かれているこの世界から，翼と足を漕ぐように動かして急いで逃

32) 『詩編』第116編15節，参照（フォーブズの注）.
33) Plato, *Phaedo* 81 a.
34) 『出エジプト記』第25章および第26章.
35) エレウシースの秘儀における入信式（フォーブズの注）.
36) *Phaedrus* 244 sgg.

げ去りながら，天のイエルサレムへ最も速く飛行して運ばれてゆくことを欲しない者がいるだろうか。われわれは駆り立てられるだろう，師父たちよ，われわれはソークラテース的熱狂によって駆り立てられるだろう。その熱狂は，われわれの心とわれわれ自身を神の中に置くほどに，われわれを心の外に置くだろう。もしわれわれ自身の中にあることをまずわれわれが実現したならば，確かにその熱狂によってわれわれは駆り立てられるだろう。なぜなら，もし道徳を通じて感情の力が，たがいにゆるぎない調和でもって共鳴するように，まさに適当に抑制されたならば，またもし弁証法を通じて理性が整然と進行して働くならば，われわれはムーサの女神たちの熱狂によってかきたてられて，耳で天上的調和の調べを飲み干すだろう。そこでムーサの女神たちの指導者であるバッコスは，その秘儀，すなわち自然の目に見える徴において[37]，神の目に見えないものを，哲学するわれわれに示しながら，神の家の豊かさによってわれわれを酔わせるだろう。その家においてもしわれわれがモイゼのように信仰厚ければ，至聖なる神学が近づいてきて，二重の熱狂によってわれわれを鼓舞するであろう。なぜなら，われわれはその卓越せる高所へと高く揚げられて，そこから，あるもの，あるであろうもの，あったものを，すべて不可分な永遠性において測るであろう。そしてわれわれはアポッローンの予言者たる詩人として，それら諸存在の本源的な美を嘆賞しながら，翼の生えた，その美を愛する者となるであろう。最後に，刺激によってのようにえも言われぬ愛によってかきたてられ，燃える熾天使のようにわれわれの外に置かれ，神聖によって満たされて，われわれはもはやわれわれ自身ではなくして，われわれを造った方御自身となるであろう。

もし誰かがアポッローンの聖なる名前の意味と，その隠された玄義を探究するとするならば，その名前は，この神が詩人に劣らず哲学者であることを十分に示すだろう。アンモニウスがそのことをすでに十分に述べたので[38]，わたしがそれを別な仕方で取り扱ういわれはない。だが師父たちよ，デルポイの三つの訓戒が心に浮んで来よう。これらの訓戒は，この世の中に来るすべての霊魂を照らす[39]，虚構のではなくして真実のアポッローンの，至聖にして至尊な神殿に入ろうとしているひとびとには，きわめて必要なものである。それについての論議が現在なされているこの三重の哲学を，われわれが全力でもって抱擁するようにということ以外のいかなる忠告をも，その訓戒はわれわれにあたえないことを，あなた方は見るであろう。実際，あのメーデン・アガン，すなわち「度を過ごすな」は，道徳が取り扱う中庸という論拠を通じて，あらゆる徳の規範と規則を正しく規定している。それから，あのグノーティ・セアウトン，すなわち「汝みずからを知れ」は，全自然の認識へとわれわれを駆り立て，励ます。人間の自然（本性）はかかる自然の介在者であり，いわばそれの結合者[40]である。実際，まずゾロアストラが書き，次いでプラトーンが『アルキビアデス』の中で書いたように[41]，自分自身を知る者は，自分自身の中にすべてのものを知るからである。最後に，自然哲学を通じてかかる知識によって照らされ，今や神に最も近しい者としてエイすなわち「汝あり」と言いながら，親しく同様にしてまた幸福に，神学的挨拶によって真のアポッローンに呼びかけるであろう。

またきわめて賢明なピュタゴラスに相談してみよう。かれは自分を賢者という名に値するものとはみなさなかったことのために特に賢明であった。かれはまず，われわれが枡の上に坐らないように戒めるであろう。すなわち，霊魂がすべてのものをそれによって測り，判断し，検査する理性的部分を，われわれは無為な怠惰にゆだねることによって失うことなく，それを弁

37) 『ローマ人への手紙』第1章20節，参照.

38) Plutarch, *De EI Delphico* 2, 385 b, in *Moralia*.（ウォリスの注）

39) 『ヨハネによる福音書』第1章9節（フォーブズの注）.

40) Cfr. Nonius Marcellus, I, 83.（ガレンの注）

41) Plato, *Alcibiades*, I, 133 c ff.

証法的な訓練と規則でもって不断に指導し，励ますように戒めるであろう。そこでかれは特に二つのことに用心すべきことをわれわれに指摘するであろう。すなわち，太陽へ向かって放尿しないことと，供儀の間に爪を切らないこととである。だが道徳を通じて，われわれがあふれる快楽への欲望から解き放たれ，いわば怒りの爪の鋭い先端を切り，魂のとげとげしさを切り取った後に，まさにその時に初めて，われわれは上述したバッコスの聖なる秘儀に参加し，太陽がまさしくその父にして指導者だと言われるわれわれの観想に専念しうるだろう。最後にピュタゴラスは，雄鶏を飼育するように忠告するだろう。すなわち，われわれの霊魂の神的部分を，あたかも固い食物や天上における神々の食物でもってのように，神的事物の認識でもって養うように忠告するだろう[42]。これが，その姿を見ることをライオン，すなわちあらゆる地上の権力が恐れ畏敬している，雄鶏である。これが，知性のあたえられた，と『ヨブ記』においてわれわれの読む[43]，あの雄鶏である。この鶏が鳴くと，迷いに陥っている人間は正気にかえる。この鶏は，毎日，朝の薄明の中で，夜明けの星々が神をほめ讃えるときに，いっしょに歌う。死に瀕しながらソークラテースは，自分の霊魂の神性をより大いなる世界の神性に結びつけることを希望していたとき，今や病気のあらゆる危険の外に置かれたので，アスクレピオス，すなわち霊魂の医者に，この鶏を負うていると言った[44]。

またカルデア人たちの記録を調べてみよう。（もしそれらの記録を信じるならば）幸福への道は，同じ学芸を通じて死ぬべき者たちに開かれていることを，われわれは見るであろう。カルデア人の解釈家たちの書くところによると，霊魂には翼があり，翼が落ちてなくなると霊魂は身体の中へ真っさかさまに落ちてしまい，その後その翼が霊魂に生えてくると，それはまた天へ飛び上がる，というのがゾロアストラの言葉であった[45]。弟子たちがかれに，どのようにすればよく羽毛の生えた翼でもって飛ぶ魂を得られるかと尋ねると，かれは「翼を命の水にひたすがよい」と言った。さらにかれらが，その水をどこで求められるかと尋ねると，かれは比喩（それがこの人の習わしであった）を用いてかれらにこう答えた，「神の楽園は四つの川によって洗い清められ，ひたされている。その同じ川から，あなた方にとって救いとなる水を汲み取るがよい。北から流れる川の名はピションであって，正しいことを示している。西からの川の名はディコンであり，あがないを意味している。東からのその名はキッデケルで光のことを言っており，南からのそれはペラトで，敬虔と解釈されうる」[46]と。

師父たちよ，注意して，ゾロアストラのこれらの教義が何を意味しているのかを入念に考察してみられよ。それは確かに次のようなこと以外の何ものをも意味していない。すなわちわれわれは，あたかも西の川波によってのように道徳科学によって，目のけがれを浄めるべきこと。あたかも北の定規によってのように弁証法によって，正しいことへとその鋭いまなざしを向けるべきこと。それから自然の観察において，あたかも昇ろうとしている太陽のさしそめの光のように，真理のなお弱い光に慣れるべきこと。したがってついには，神学的敬虔と神の至聖なる礼拝を通じて，あたかも天の鷲のように，勇敢に南中している太陽の最もきらめく輝きに耐えるべきこと。これらは恐らく，まずダヴィドによって歌われ，またアウグスティヌスによってより詳細に説明された，朝の，昼の，そして

42) Porphyrius, *Vita Pythagoras* 42 ; Jamblichus, *Protrepticus* 21. Cfr. Ficini, *Commentariolus in symbola Pyth.* (Suppl. Ficin., II, 100-3).

43) 『ヨブ記』第38章36節．「この節の翻訳（「誰が雄鶏に知性をあたえたか」）は，聖書の多くの翻訳において一致しておらず，論争のまととなっている．ピーコの語義は，聖ヒエロニムスの翻訳（いわゆる『ヴルガータ』）やヘブライ典礼と一致している」（ピニャニョーリの注）．

44) Plato, *Phaedo*, 118 a.

45) Cf. Pselli et Plethonis, *In Oracula Chaldaica*, Amsterdam, 1688, pp. 81 et 91.

46) 『創世記』第2章10-14節，参照．

47) 『詩編』第55章18節．Augustini, *De Genesis ad litteram*, IV, 29-30 (P. L. XXXIV, 315-6).

夕方の認識である[47]。これは，熾天使をまっしぐらに燃え上がらせ，智天使を等しく照らし出すあの真昼の光である。これは古代の父アブラハムがつねにそこへ向かって旅して行ったあの地域である。これは，カバラ信奉者たちやモール人たちの教義が伝えたように，けがれた精神には余地のないあの場所である。そして天からの人間の突然の墜落がわれわれの頭をめまいによって断罪したので，またエレミアにしたがえば，死が窓から入って来て[48]肝臓と胸をそこなったので，謎のヴェールのもとにではあるとしても，もしいっそう秘密な玄義のあるものを公にすることが正当であるとするならば，われわれは天の医者であるラファエルを招いて，あたかも健康薬によってのように道徳と弁証法によって，われわれを解放してもらおう。良い健康を回復するとわれわれの中に，神の力ガブリエルが住むであろう。かれは自然の奇跡を通じてわれわれを導き，至るところに神の徳と権能を示しながら，最後に最高の司祭ミカエルにわれわれを委ねるであろう。ミカエルは，哲学のために尽したひとびとを報いるのに，あたかも宝石の冠によってのように，神学の司祭職によって標示するであろう。

尊敬すべき師父たちよ，これらがわたしを哲学の研究へと，単に鼓舞したのみならず，駆り立てた理由である。特に高位のひとびとの中で，あるいは中位の身分で生活しているすべてのひとびとの中で，哲学の研究を非難するのをつねとしているひとびとにもし答えるのでなかったならば，わたしはたしかにこれらのことを述べはしなかったろう。実際今や，この哲学することのすべてが，（それはわれわれの時代の不幸なのであるが）名誉や栄誉とされているよりも，むしろ軽蔑され侮辱されている。このようにして，まったく哲学すべきでないか，僅かの者たちだけ哲学すべきだという，この恐るべき奇怪な信念が，ほとんどすべてのひとびとの心に入りこんだ。あたかも，事物の諸原因，自然の諸経路，宇宙の理由，神の慎慮，天と地の神秘を，目前にまた手前にきわめて確実に知得するということが，もしひとがそこから何らかの利益をあさったり，もうけを得たりすることができないならば，まったくむなしいことであるかのようである。いやむしろ，（ああ，悲しいかな！）知恵の研究を金銭ずくでする者たちでないならば，今や賢者とはみなされないし，また神々の贈物としてひとびとの間に宿っている貞潔なパッラス女神を，追い払われ，嘲り出され，引っ込まされた者と見るほどまでになったのである。パッラス女神は，あたかも身を売って，犯された純潔の報酬を受けとったかのように，良からぬ仕方でととのえられた金銭を愛人の銭箱の中へと持ってゆくのでないならば，かの女を愛する者を，かの女に味方する者を，もてないのだ。

わたしがこれらすべてのことを，この上ない悲しみと憤りなしではなく語るのは，この時代における君侯たちに対してではなく，哲学者たちに対してである。かれらは，哲学者たちにはいかなる報酬も褒賞も設定されなかったがゆえに，哲学すべきではないと信じまたそう公言している。あたかも，このひとつの言葉でもってかれらがみずから哲学者ではないことを示さなかったかのようにである。実際，かれらの全生活は利得や野心にもとづいているので，かれらは真理の認識をそれ自身のために抱擁することはしないのである。わたしは次のことを自分に認容するだろう。そして次のようなことで自分が賞められても，一向に赤面しないだろう。すなわち，わたしは哲学するためということ以外のいかなる理由のためにも決して哲学しなかった。またわたしの研究やわたしの夜業から，魂の教化，およびわたしによって最も欲求された真理の認識ということ以外の，いかなる報酬や収益をも，わたしは希望しなかったし，求めなかった。わたしはこの真理の認識ということをつねに非常に欲求する者であり，きわめて愛する者であったので，公私の事柄へのあらゆる関心を放棄して，観想するための閑暇に自分のすべてを捧げたのである。嫉妬するひとびとのいかなる中傷も，知恵の敵たちのいかなる悪口も，

48) 『イエレミア書』第9章21節.

そういうことをしないようにわたしを思いとどまらせることは，今までできなかったし，将来もできないであろう。他人の判断よりも，むしろ自分の良心に依存することをわたしに教えたのは，哲学そのものであった。また，わたしが悪く言われているのを聞くことよりも，むしろわたし自身が悪いことを言ったり行なったりしないよう，つねに考えることをわたしに教えたのも，哲学であった。

いとも尊敬すべき師父たちよ，わたしのこの討論そのものも，良き学芸に好意を示しておられ，あなた方のいとも尊き御臨席によってその討論に名誉をあたえることをお望みになられた，あなた方すべてには好ましく喜ばしいことであるように，他の多くの者たちには厄介でわずらわしいことであるのを，わたしはもちろん知らないわけではなかった。また，わたしの企てをこれまで非難した者たちや，現在多くの名目で非難している者たちがいないわけではないことを，わたしは知っている。美徳をめざして不正に誤って行動する者たちよりも，多くのとは言わないまでも，より少なくはないののしる者たちをもつのが常であった。さらに，討論するというこのやり方全体や，学芸について公に議論するというこの習わしを是認しない者たちがおり，かれらはそうしたことが，博識を得ることよりも，才能と学識を見せびらかすことへ向けられていると主張している。なるほどこの種の練習に不賛成でない者たちもいるが，そのかれらもわたしにおいてはその練習を賛成しないのである。なぜなら，わたしはこの年で，すなわちやっと24歳で，キリスト教神学の最も崇高な玄義について，哲学の最高の論題について，知られていない学問について，きわめて有名な都市において，きわめて学識あるひとびとの非常に大きな集会において，教皇庁のもとで，討論を提起するなどということを敢えてしたからである。他のひとびとは，わたしが討論することをわたしに認めるとしても，わたしが900の命題について討論することを認めようとしない。そうすることは，わたしの力を超えている位余計な野心的なことだと，かれらはとがめ立てするのである。もしわたしが仕事としている哲学がわたしにそのように教えたのならば，それらのひとびとの異議にわたしはすぐさま屈服したであろう。そして哲学がそのように教えるからには，もしわれわれの間のこの議論がけんかしたり口論したりする意図で企てられたのだとわたしが思ったならば，わたしは今は答えないであろう。それゆえ，けなしたり挑んだりするあらゆる企図，また神々の合唱隊には決してないとプラトンの書いている[49]嫉妬もまた，われわれの心から遠ざけしめよ。そしてわたしが討論すべきであるかどうか，しかもこのように多くの問題について討論すべきであるかどうか，親しく検討してみよう。

まず，公に討論するというこの習わしをとがめ立てするひとびとに，わたしは確かに多くを語らないだろう。なぜならこのわたしの罪は，もしそれが罪とみなされるのならば，きわめて優れた博士たちよ——あなた方はしばしばこの義務を最高の賞讃と光栄なしではなく果たされたのだが，——そのあなた方みなと共通しているのみならず，またプラトーンやアリストテレースや，あらゆる時代の最も賞讃に価すると認められた哲学者たちとも共通しているのである。かれらの求めていた真理の認識に達するためには，討論の練習にできるだけしばしば参加すること以上にかれらにとってよいことは何もないということは，かれらにはきわめて確かなことである。実際，身体の力は体操によっていっそう強くなるように，魂の力はこのいわば学芸の格闘訓練場において，はるかに強力で強壮になるのである。また，詩人たちがかれらの歌ったパッラスの武器ということによって，あるいはヘブライ人たちが鉄を賢者たちの象徴であると言うとき，この種のきわめて名誉ある試合が知恵に達するために非常に必要なものである，ということ以外のことをわれわれに意味していたとは，わたしには思われなかった。そしてこうしたことのために，カルデア人たちはまた，哲

49) Plato, *Phaedrus*, 247 a. Cf. *Timaeus* 29 e.

学者となるはずの者の誕生に際して，火星が水星を三分の一対座の相で見ることを望むのである。あたかも，もしこれらの会合，これらの戦いが取り止めにされるならば，すべての哲学は怠惰な眠気をもよおすものとなるであろう，というかのように。

しかし実際，わたしをこの任務にふさわしくないと言うひとびととでは，わたしの弁明の仕方はいっそう難しい。なぜなら，もしわたしがそれにふさわしいと言うならば，多分わたしは無遠慮なうぬぼれすぎている者と見られるだろう。もしわたしがそれにふさわしくないと告白するならば，わたしは無謀な無思慮な者という印をになうべき者とみられるだろう。わたしは，後に非難されずになしとげないわけにいかないことを，わたし自身について非難されずに約束できないのであるから，わたしがどんな苦境に陥ったか，わたしがどんな立場に置かれているか見ていただきたい。恐らくわたしは，すべての者の中には霊があるというあのヨブの言葉[50]を役立てることができよう。また，「誰もあなたの年若いことを軽んじないように」という言葉を，ティモテオとともに聞くことができよう[51]。だがわたしは自分の良心からいっそう真実に，わたしの中に偉大なものや特異なものは何もない，と言うであろう。わたしは良き学芸について恐らく熱心であり熱望していることを否定するものではないが，しかしながら学識ある者という名称を自分に引受けたり，僭称したりすることはない。わたしがこのように大きな重荷を肩に載せたということは，わたしが自分の無力を目覚していなかったためではなくして，この種の戦い，すなわち学芸上の戦いについてわたしは，それにおいては負けることが得なのだという特異性があるということを，知っていたためであった。こうしたことから，最も弱い者もこれらの戦いをただ単に回避しないようにしうるし，また回避しないようにすべきであるのみならず，またさらにそれらを欲求しうるし，欲求すべきである，ということになる。それというのも，屈する者は勝者から損害を受けるのではなくして，利益を受けるのだ。なぜならかれは，その勝者を通じていっそう裕福な者となって，すなわち将来の戦いのためにいっそう学識ある者となり，また備えを整えた者となって家へ帰るのであるから。この希望によって鼓舞されて弱い戦士であるわたしは，すべての者たちの中で最も強く最も活発な戦士たちと，かくも重大な戦いを決することを何ら恐れなかったのである。それにもかかわらずそれが無謀になされたのか否かは，とにかく，わたしの年齢からではなくして，戦いの結果からいっそう正しく判断されうる。

第三に，提題があまりに数多いことによって憤るひとびとに答えることが残っている。あたかも，この負担がかれらの肩にのしかかって，その労苦がいかに大きくとも，むしろ耐え忍ばねばならないのはわたしひとりだけではなかったかのようである。他人の勤勉を制限しようと欲することは，またキケロの言うように，大きいほど良いという事柄において，中庸を望むことは，確かに不適当であり，あまりに気むずかしすぎる[52]。このように大きな冒険においては，確かに，わたしが屈服するかあるいは満足するかは必然的である。もしうまく行ったとするならば，10の問題においてなし遂げることが賞讃すべきであることが，なぜ900の問題においてもなし遂げたことが責められるべきこととみなされるのか，わたしには分からない。もしわたしが失敗したとすれば，かれらは，わたしを憎んでいればそのことによってわたしを非難する理由をもつであろうし，わたしを愛していればそのことによってわたしを弁護する理由をもつであろう。なぜなら，このように重大でこのように大きな事柄において，青年が乏しい才能とわずかな学識しかもたぬことによって失敗したということは，非難よりもむしろ赦しに値する

50) 『ヨブ記』第32章8節.『ヴルガータ』は「人間の中には霊がある」Spiritus est in *hominibus*. と読んでいる．ピーコは「すべての者の中には」omnibus と読んでいる（ウォリスの注）.

51) 『ティモテオへの第一の手紙』第4章12節.

52) *De finibus* I, 1.

であろう。それどころか，詩人によれば，

力が足りなければ，勇敢さがきっと
賞讃となるだろう。大いなることにおいては，
望んだことで十分なのだ[53]。

われわれの時代において多くの者たちが，レオンティーニのゴルギアスをまねて，単に900の問題についてばかりではなく，あらゆる学芸のあらゆる問題についても討論を提起することが，賞讃なしではなく，習わしとなっているとするならば，なるほど多くの問題についてではあるが，一定の限定された問題について討論することが，なぜわたしには，責められることなく，許されないのだろうか。だが，それは余計な野心的なことだとかれらは言う。そしてもしかれらが哲学する理由をわたしとともに考察するならば，それが明らかに必要であるということを，かれらの意に反してさえも告白せねばならないであろう。実際，何らかの哲学者たちの学派に，たとえば今や最も人気のあるトーマスやスコートゥスに身を捧げたひとびとは，確かに，わずかばかりの問題の議論においてその学説を試験することができる。ところがわたしは，誰の言葉でも誓いを立てることなく，哲学のあらゆる教師を渉猟し，あらゆる書物を詮索し，あらゆる学派を知ろうと企てた。それゆえわたしは，ある特定個人の教義の擁護者としてそれに拘束されて，その他を無視したと思われないために，かれらすべてについて語らねばならなかったので，個々の学派についてはわずかの問題が提起されたとしても，すべての学派についていっしょに提出された問題は，きわめて数多くならざるを得なかった。そして，嵐がわたしを運んでゆくところにはどこへでも，客としてつれて行かれる[54]からといって，ひとはわたしを非難しないでいただきたい。実際，あらゆる種類の著作家たちをひもとくことによって，かれらが読めば読みえたいかなる論文をも，読まずに顧みなかったということがないというこのことは，古代のすべてのひとびとによって守られたことであった。そしてこのことは特にアリストテレースによって守られた。かれはこのため，プラトーンによって読書家と呼ばれた。ストア派とかアカデーメイア派とかいうただひとつの学派の中へ自分を閉じこめたことは，確かに狭い心のなせる業である。あらかじめすべての学派を親しく認識していなかった者が，すべての学派の中から自分に固有の学派を正しく選んだなどということはありえない。各々の学派の中には，その他の学派と共通していない何かしら顕著なものがあるということを，つけ加えよ。

そこで今，われわれの学者たちから始め，哲学が最後に来るようにするとすれば，ヨハンネス・スコートゥスの中にはある活発で鋭敏なものがある。トーマスの中には堅固で公平なものが，エジディウスの中にはきびきびして正確なものが，フランチスクスの中には透徹して鋭いものが，アルベルトゥスの中には古く尊い，広大で偉大なものが，ヘンリクスの中には，わたしにはそう見えたように，つねに崇高で尊敬すべきものがある。アラブ人たちのもとでは，アヴェロエスの中には確固として不動のものが，アヴェンパーチェやアルファラビの中には重々しくて熟考されたものが，アヴィチェンナの中には神的でプラトーン的なものがある。ギリシア人たちのもとでは，哲学は一般に確かに光り輝いており，とりわけ清純である。シンプリキオスにおいては，哲学は富んで豊かであり，テミスティオスにおいては，優雅で簡潔であり，アレクサンドロスにおいては首尾一貫して学識があり，テオフラストスにおいては重々しく入念に作り上げられており，アンモニオスにおいては流暢で快い。そしてもしあなたがプラトン主義者たちの方を振り向くとするならば，わずかなひとびとだけ挙げるとしても，ポルフュリオスにおいては，あなたは素材の豊富さと多様な信仰を楽しむだろう。イアンブリコスにおいては，きわめて秘密な哲学と蛮族たちの玄義を尊重するだろう。プロティノスにおいては，あなたがとりわけ感嘆すべきものはない。なぜな

53) Propertius, *Elegiae*, II, 10, 5-6.
54) Horatius, *Epistulae*, I, I, 15.

ら，かれは自分をあらゆる面で感嘆すべきものとして示すからである。かれは神的なものについては神的に語り，人間的なものについては人間を遙かに越えて話の学識ある婉曲さによって語るので，プラトン主義者たち自身骨を折りながらかれをほとんど理解しないのである。もっと新しいひとびと，すなわち，アジア的豊饒に満ちているプロクロスや，かれから流れ出た者たち，ヘルミアス，ダマスキオス，オリュンピオドロスや他の多くの者たちを，わたしは省略する。かれらすべての中に，プラトン主義者たちの独特の象徴であるト・テイオン，すなわち神的なものがつねに輝き出ている。

より真なる教説を攻撃し，思想の正当な理由を難癖つけて嘲弄するような学派がもしことによってあるとしても，それは真理を強くはするが弱めることはなく，またあたかも扇ぐことによって揺り動かされた炎のように，真理をかきたてはするが，消しはしない。こうした理由によって動かされてわたしは，単にあるひとつの学説の意見(あるひとびとの望んだように)のみならず，あらゆる種類の学説の意見を公衆の前に提出したいと思った。それというのも，多くの学派のかかる比較や，多様な哲学の議論によって，プラトンが『書簡』の中で述べている[55]あの真理のひらめきが，深みから昇る太陽のように，われわれの魂にいっそう明るく輝かんがためである。ギリシア人やアラブ人の哲学者たちを度外視して，ラテン人たちの哲学だけ，すなわちアルベルトゥスや，トーマスや，スコートゥスや，エジディウスや，フランチスクスや，ヘンリクスの哲学だけが論じられたとしても，何の価値があったろうか。あらゆる知恵は蛮族からギリシア人たちへ，ギリシア人たちからわれわれへと流れ及んだのであるから[56]。そのようにわれわれのラテン人たちは，その哲学する方法において，外国人たちの発明に依存し，他人のものを完成することで，つねに十分とみなしてきた。プラトン主義者たちのアカデメイアが招かれなかったとするならば，逍遙学派のひとびとともに自然的な事物について論じたとしても，何の価値があったろうか。神的な事柄についてのプラトン主義者たちの学説は，——アウグスティヌスの証言によれば——あらゆる哲学の中でつねに最も聖なるものとみなされてきた[57]。そしてそれは，わたしの知る限り，多くの世紀の後今や初めてわたしによって——その言葉によって嫉妬のなからんことを——公開討論の試験の下にもたらされた。何も寄与することなしに賢者たちの饗宴へやって来た者たちのように，もしわれわれ自身のものであるものを何も，われわれの才能によって生み出したものや彫琢したものを何も，われわれがもたらさなかったとするならば，他のひとびとの意見を，それらがいかに多かろうと，論じたところでそれが何であったろうか。セネカの言うように[58]，もっぱら注解書からだけ知るということは，確かに卑しいことだ。そしてあたかも先人たちの発明がわれわれの勤勉に道をふさいだかのように，あたかも自然の力がわれわれの中に枯渇したかのように，もし真理を証示しえなかろうと，少なくとも遠くからそれをほのめかすものを何もわれわれ自身から創り出さないということは，卑しいことだ。なぜなら，もし農夫が畑において収穫のないことを憎み，夫が妻において不妊なことを憎むとするならば，はるかにずっと高貴な子孫がそれから望まれれば望まれるほど，確かにそれだけいっそう不毛な魂を，それに入り組み結び合わさった神的精神は憎むであろう。

そのためわたしは，通常の学説の外に，ヘルメース・トリスメギストスの古代の神学から多くのものを，カルデア人たちやピュタゴラスの教説から多くのものを，ヘブライ人たちの最も秘めたる玄義から多くのものをつけ加えたことで満足せず，自然的なまた神的な事柄についてわたしによって発見され省察されたきわめて多

55) Plato, *Epistulae*, VII, 341 d.

56) Cf. Eusebius, *Praeparatio evangelica*, X, 10, 2; XIV, 10, 43 sgg. Theodoretus, *Curatio*, I, 41 e segg.

57) Cf. *City of God* ix, 1 and many other passages. (フォーブズの注)

58) Seneca, *Epistulae*, 33, 7.

くのものをも討論すべく提起した。わたしはまず，多くのひとびとによって信じられながら，誰によっても十分に証明されなかった，プラトーンとアリストテレースの調和を提起した。ラテン人たちのもとでは，ボエティウスがそれを行なうと約束したのだが，かれがつねに行なおうと望んでいたことを行なったという形跡は，決して見出されない[59]。ギリシア人たちのもとではシンプリキオスが同じことを公言したが，願わくはかれが約束したようになし遂げたであろうことを[60]。またアウグスティヌスは，『アカデーミア派に反対して』において[61]，かれらのきわめて精妙な議論でもって同じことを，すなわち，プラトーンの哲学とアリストテレースの哲学が同じものであることを，証明しようと試みた多くの者がいないわけではなかったと書いている。文法家のヨアンネスは同様に，プラトーンの言ったことを理解しない者たちにおいてのみプラトーンはアリストテレースと相違するのだ，と言っているけれども，それを証明することを後世のひとびとに残した。さらにわたしは，不一致であるとみなされているスコートゥスとトーマスの見解，またアヴェロエスとアヴィチェンナの見解は一致している，とわたしの主張する若干の章句をつけ加えた。

第二にわたしは，プラトーン哲学と同様アリストテレース哲学に関して，わたしが考案したことを措定した。それから72の新しい自然的および形而上学的命題を措定した。それらの命題を保持する者ならば，もしわたしが誤っていなければ——そのことは間もなくわたしに明らかとなるであろうが——，自然的なまた神的な事柄について提起されたどんな問題でも，学校において読まれたり現代の学者たちによって培われているあの哲学を通じてわれわれが教えられているのとは遙かに別な論法によって，解くことができるであろう。師父たちよ，——誰かがあざけって言っているように——わたしが他のひとびとの論じたものを辛うじて読める若年なのに，新しい哲学をもたらそうと欲しているからといって，ひとはそれほど驚いてはならない。むしろ，もしそれが擁護されるならばその哲学を賞讃すべきであり，もし斥けられるならば非難すべきである。そして最後に，これらのわたしの発見したものやわたしの書いたものが判断されるようになるとき，著者の年齢をではなくして，むしろその価値と欠点を数えあげるべきである。

さらにその外に，数を通じて哲学する他の方法がある。わたしはそれを新しいものとして紹介したが，実際には古いものである。そしてそれは，古代の神学者たち，特にピュタゴラス，アグラオファモス，フィロラオス，プラトーンおよび初期のプラトーン主義者たちによって注目されていたのだが[62]，この時代では，他の光輝ある事柄のように，後世のひとびとの無関心によって，それのある痕跡が辛うじて見出されるほどまでにすたれてしまった。プラトーンは『エピノミス』において[63]，あらゆる自由学芸および観想的諸科学の中で，数える科学が主要なまた最も神的な科学であると書いている。同様にかれは，なぜ人間は動物たちの中で最も賢明であるのかと問いながら，なぜなら人間は数えることを知っているからだと答えている。アリストテレースもまた『問題集』において，その見解に言及している[64]。「数えることを知る者はすべてのことを知る」というのがバビロンの人イブン・ゾールの言葉であったと，アブー・マーシャルが書いている。もし数える学芸ということによって，今とりわけ商人たちが最も熟練しているあの技術のことを理解したとするならば，以上述べたことは決して本当ではありえない。こうしたことをプラトーンもまた，この神的な算術が商人たちの算術であると解さないように大声でわれわれに警告しながら，証言

59) Boethius, *De interpretatione*, II, 3.
60) Simplicius, *Categoriae*, 28 ; *Physica*, 404, 16.
61) Augustinus, *Contra Academicos*, III, 42.
62) Proclus, *Comm. Tim.*, V. proem. ; *Theologia Platonica*, I, 6.
63) *Epinomis* 976 c sgg. ; *Respublica* 525 d e.
64) Aristoteles, *Problemata*, XXX, 6, 956 a.
65) *Respublica*, 525 b sgg.

している[65]。それゆえわたしは，多くの夜ふかしの勉強をした後，このように賞揚される算術を探し出したと思われるので，この事柄を試験してみようとして，自然学的な問題や神的な問題の中で主要なものとみなされる74の問題に，数を通じて公に答えるだろうと約束した。

わたしはまた，呪術的定理を提起した。それにおいてわたしは，呪術は二様のものであることを示した。そのひとつは，まったく悪魔の業と権威にもとづいており，実に呪われるべき奇怪なものである。もうひとつは，それが正しく探究されるときには，自然哲学のまったくの完成にほかならない。ギリシア人たちはそれら両方に言及した際，前者を決して呪術の名に値するものと認めず，魔法と名づけており，後者をあたかも完全な最高の知恵であるかのように，マギ僧の術という固有な独特の名称で呼んでいる。実際，ポルフュリオスが言うように[66]，ペルシア人たちの言葉でマグスは，われわれのもとにおいて神的なものの解説者や敬愛者というのと同じことを意味している。さらに，師父たちよ，これら二つの術の間の差異や不同は大きい，いやむしろきわめて大きい。前者は，キリスト教のみならず，あらゆる法，よく秩序立てられたあらゆる国家によって非難され，呪われている。後者は，あらゆる賢者，天上的なまた神的な事柄を熱心に求めるあらゆる国民によって是認され，いつくしまれている。前者はあらゆる技術の中で最も欺瞞的なものであり，後者は確固とした，信頼すべき，堅固なものである。前者を崇め尊んだ者はつねに秘め隠した。なぜなら，それを言う本人の恥辱と不面目になったであろうから。後者からは学芸の最高の名声と栄誉が，古代においてもまたほとんどつねに願い求められた。哲学者や良き学芸を学ぶことを欲求する者で，前者の研究者は決していなかった。後者を学ぶために，ピュタゴラスやエンペドクレースや，デーモクリトスや，プラトーンは航海し，帰るとそれを教え，それを秘密の中で特別なものとみなした[67]。前者はいかなる論拠によっても証明されないように，そのようにいかなる確かな著者たちによっても承認されない。後者は，あたかもきわめて有名な両親たちによって名誉をあたえられたかのように，特に二人の創始者をもっている。すなわち，ヒュペルボレイオス人のアバリスが真似たザルモクシスと，多分あなた方の思っているそれではなくして，オロマソスの息子であるゾロアストラとである[68]。

かれら二人の呪術がいかなるものであるかということを，もしわれわれがプラトーンに尋ねるとするならば，かれは『アルキビアデース』の中で次のように答えるだろう。すなわち，ゾロアストラの呪術は，ペルシア人の王たちが，その息子たちが世界の国家の模範にしたがってかれら自身の国家を統治することを教わるようにと，それによってその息子たちを教えた，神的なものの学問以外のものではない，と[69]。プラトーンは『カルミデース』の中でこう答えるだろう[70]。すなわち，ザルモクシスの呪術は，節制を通じて健康が身体にもたらされるように，その医術を通じて節制が魂にもたらされる，そうした魂の医術である，と。

その後，カロンダス，ダミゲロン，アポッローニオス，ホスタネース，およびダルダノスが，かれらの跡にしたがいつづけた[71]。ホメーロスがその跡にしたがった。かれが，他のすべての知恵のようにこの知恵をも，そのウリクセースの漂泊のもとに秘め隠したことを[72]，われわれはいつかわれわれの詩的神学において証明するであろう。エウドクソスやヘルミッポスがそれにしたがった[73]。ピュタゴラス的およびプラトーン的玄義を探究したほとんどすべてのひとびとが，それにしたがった。さらに，その呪術を

66) Porphyrius, *De abstinentia*, IV, 16.
67) Plinius, *Naturalis historia*, XXX, 1(2).
68) *Ibidem.*
69) Plato, *Alcibiades* I, 121 sgg. Cf. Apuleius, *Apologia.*
70) Plato, *Charmides*, 156e-157a.
71) Cf. Tertullianus, *De Anima*, 57.
72) Plinius, *loc. cit.*
73) Plinius, *op. cit.* Diogenes Laertius, I, proem. 8.（ガレンの注）

かぎ出したもっと後のひとびとの中から，わたしは三人を見出す。すなわち，アラブ人のアル・キンディー，ロージャー・ベイコン，およびギョーム・ド・パリである。プロティノスもまた，マグスは自然の奉仕者であって，自然の作者ではないということを論証するとき，それに言及している[74]。このきわめて賢明な人物は，この種の呪術を是認し主張している。だがかれは他方の呪術を非常に忌み嫌っていたので，悪魔たちの祭儀に招かれたとき，かれがかれらの方へ行くよりも，かれらがかれの方へ来る方が正しいと言ったが，まったくもっともなことである[75]。実際，第一の呪術が人間を悪の力に服従する者とし隷属する者とするように，第二の呪術は人間を悪の力の支配者にして主人にする。前者は結局，技術の名をも科学の名をも自分に要求することはできない。後者は，最も高い玄義に満ちていて，最も秘密な事物の最も深い観想を抱懐し，ついには全自然の認識を抱懐する。後者は，神の恩恵によって世界の中へまき散らされた美徳を，あたかも隠れた所から光の中へと呼び出すことによって，不思議なことを行なうことよりも，むしろ不思議を行なう自然に熱心に仕える。後者は，ギリシア人たちがいっそう意味をこめてシュンパテイアンと呼ぶ宇宙の合意を[76]，内的にいっそうくまなく探し求め，自然の相互認識をはっきり知覚し，呪術師たちによってユンゲス[77]と呼ばれているそれ固有の生まれながらの魅惑するものを，各々の事物に当てがうことによって，世界の奥処に，自然の内懐に，神の蔵や秘密の中に隠された奇跡を，あたかもそれ自身が作者であるかのように，公にする。そして農夫がにれの木をぶどうの木と結婚させるように，マグスは大地を天空と，すなわち，より劣ったものをより優れたもののたまものや徳能と結婚させる。そのことから，前者が奇怪で有害なものと見えるのと同じほど，後者は神的で健全なものと見えるということになる。このため特に，前者は人間を神の敵たちにひき渡すことによって，かれを神から遠ざけるが，後者は神の御業の感嘆へとかれを駆り立て，その結果，自発的な愛徳，信徳，および望徳がきわめて確かに生じるのである。なぜなら，神の不思議を絶えず観想すること以上に，神の信仰と礼拝へとひとを推し動かすものはない。われわれの論じているこの自然的呪術を通じて，神の不思議をよく探索したときには，われわれは作者の崇拝と愛へと熱烈に鼓舞されて，次のように歌うように駆り立てられるだろう。すなわち，「天と地のすべては，あなたの栄光の威厳で満ちている」[78]と。そして呪術についてはもう十分である。わたしはそれについてこれらのことを語った。なぜなら，犬が知らない者たちにいつも吠えるように，自分の理解しないものをしばしば非難したり憎んだりする者が多くいることを，わたしは知っているから。

今や，ヘブライ人たちの古代の玄義から掘り出したことで，至聖にして普遍的な信仰を堅くすべくわたしがもたらしたことへと進んで行こう。そしてそれらの事柄が，それらに通じていないひとびとによって，恐らく虚構だとか，つまらぬ冗談だとか，詐欺師たちのつくり話だとかとみなされないように，それらがいかなるものであり，どのようなものであり，どこから出てきたものであり，いかなる著者たちまたどんな著名な著者たちによって確認されたものであるのか，またそれらがどんなに秘められた，どんなに神的なものであるのか，そしてヘブライ人たちのわずらわしい中傷に対してわれわれの宗教を擁護するために，われわれの宗教を奉じるひとびとにとってそれらがどんなに必要であるのかを，すべてのひとびとが理解することをわたしは望む。ヘブライ人たちの有名な博士たちのみならず，またわれわれの側のひとびとの

74) Plotinus, *Enneades* IV, IV, 42-43.（ガレンの注）
75) Porphyrius, *Vita Plotini*, X, 34-35.
76) Plinius, *Nat. Hist.* XX, 1.
77) *Scholia in Theocritum vetera* (ed. Wendel), II, 17. Cf. *Oracula Chaldaica*, ed. Kroll, pp. 39 seg. Psellus, *Hypotyposis*, ed. Kroll, 4 (p. 73).
78) 『イザヤ書』第6章3節.
79) 『第四エズラ書』第14章45-47節. Hilarius, *Tractatus Psalmi* II, PL. 9, 262 cd-263 a. Origenes, *In Evang. Joannis*, XIX, 2.（ガレンの注）

中からもエズラ，ヒラリウス，およびオリゲネスが書いているところによると[79]，モイゼは山上で神から，後のひとびとに五つの書物に書き記して残した律法のみならず，またその律法の秘密の真正な説明をも受けとった。さらにモイゼは，律法をひとびとに公表するように，だが律法の解釈を書きとめたり，公に知らせたりしないようにと，神によって命じられた。だがかれはヌンの子ヨズエにだけは打ち明けるようにと命じられた[80]。次いでヨズエはかれの後につづく他の祭司長たちに次々と，沈黙の大いなる聖約によって打ち明けるようにと。あるいは神の権能を，あるいは悪人たちへのかれの怒りを，善人たちへのかれの慈悲を，すべての者たちへのかれの正義を認識するには，単純な物語でもって十分であった。また善良で幸福に生きるように，そして真の宗教を礼拝するように教えられるには，神的で有益な教訓で十分であった。しかし律法の外皮のもとに，また言葉の粗野な装いのもとに隠された，最も秘められた玄義を，最高の神聖の秘密を，庶民に公にすることは，犬たちに聖なるものをあたえ，豚たちの間に真珠をばらまくこと以外の何であったか[81]。それゆえ，これらのことを完全なひとびとに伝えるために，大衆には秘めたままでおいたということは，人間の慎慮によるものではなくして，神の掟によるものであった。そしてそれらの完全なひとびとの間でのみ自分は知恵を語ったと，パウロは言っている[82]。かかる習慣を，古代の哲学者たちはきわめて敬虔に守った。ピュタゴラスは，死に臨んで娘のダーマに託したごくわずかのことを除いては，何も書かなかった。エジプト人たちの寺院には彫られたスフィンクスが，神秘的な教義は謎の結び目（難問）を通じて世俗的な群衆から犯されないように警護されるべき旨，告げ知らせていた。プラトーンはディオニュシオスに最高の実体についてあることを書きながら，「それは謎を通じて言われなければなりません。もしこの書簡がもしかして他のひとびとの手に渡ったとしても，わたしがあなたに書いていることが他のひとびとによって理解されないように」と言っている[83]。アリストテレースは，神的な事柄について論じている『形而上学』という本は出版されているとともに出版されていない，と言っていた。これ以上何を。オリゲネスが主張するところによると，生命の師であるイエズス・キリストは弟子たちに多くのことを啓示したが，弟子たちはそれらのことが大衆にありふれたものとならないように，それらのことを書くことを欲しなかった。こうしたことをディオニュシオス・アレオパギタが最大限に確認している。かれの言うところによれば，最も秘められた玄義は，われわれの宗教の創始者たちによって，文字ではなく，話言葉を通じて，心から心へと伝えられた。神によってモイゼにあたえられた律法のあの真の解釈が，神の命令によってこれとまったく同じ仕方で啓示されたとき，それはカバラと呼ばれる。それはヘブライ人たちのもとでは，われわれのもとで *receptio*（受け入れること）というのと同じことである。それはもちろん，あるひとが他のひとからその教説を，あたかも相続上の権利によってのように，文字による記録を通じてではなく，啓示の正規の継承を通じて受け入れたということのためにである。だがヘブライ人たちがキュロスを通じてバビロン俘囚から解放され，ゾロバベルのもとに神殿を新たに建てた後，律法を再興することへと心を向けた。その当時教会の首長であったエズラは，モイゼの書を修正した後，イスラエルの種族の亡命や，虐殺や，逃亡や，俘囚のために，教理を口から口へ伝えるという祖先によってうちたてられた慣習が維持されえないということを明らかに認識し，また記録にとどめられるのでなければ記憶は長くはつづきえないゆえ，神によって許しあたえられた天上の教理の秘密は消え失せること

80) 『集会の書』第46章1節，参照.『第四エズラ書』第14章45-47節.
81) 『マテオによる福音書』第7章6節.
82) 『ローマ人への手紙』第1章17節．また『コリント人への第一の手紙』第2章6節および13節.
83) Plato, *Epist. II*, 312 de. Iamblicus, *Vita Pythagoras*, 28, 146.

になるだろう，ということをはっきりと覚ったので，その時生き残っている賢者たちを召集して，各人が律法の玄義について記憶に保持していた限りのことを公に告げ知らせるように定め，また書記たちを招いてそれらを70巻（なぜなら長老会議における賢者たちはおよそその位の人数であったから）にまとめるように定めた。こうしたことについて，わたしの言うことだけを信じるということにならないように，師父たちよ，エズラ自身が次のように語るのを聞きたまえ。「40日が過ぎると，至高なる御方は次のように語って言った。先におまえが書き記したものを公にして，価値のある者たちも無価値な者たちもそれを読めるようにしなさい。だが最後の70巻は，おまえの人民の賢者たちに，それらを渡すために，おまえは保存しておくだろう。なぜなら，それらの中には知性の水脈，知恵の泉，学知の川があるから，と。そしてわたしはそのようにした」[84]。以上は文字通りエズラの言葉である。これらはカバラの学問の書物である。これらの書物の中には主として，エズラがまさに明瞭な声で言明したように，知性の水脈，すなわち超物質的な神性についての得も言われぬ神学が，知恵の泉，すなわち叡知的で天使的な諸形相についての正確な形而上学が，また学知の川，すなわち自然的事物についてのきわめて堅固な哲学がある。わたしたちがその下に幸せに暮らしている教皇インノケンティウス8世のすぐ前の教皇シクストゥス4世は，わたしたちの信仰に公に役立てるために，これらの書物がラテン語に翻訳されるように最大の関心と熱意をもって配慮された。そしてこのようにして，教皇が死去されたときには，それらの中の3巻がラテン人たちのものとなった。これらの書物はヘブライ人たちのもとでは，今日，40歳にならなければ誰もそれらに触れることを許されないほどの敬虔さをもって，崇拝されているのである。

84) 『第四エズラ書』第14章45-47節（ガレンおよびウォリスの注）.『第二エズラ書』第14章5-6節（フォーブズの注）.

これらの書物を少なからざる出費をして買い求め，この上ない勤勉さとたゆまざる労苦を重ねて読み上げたとき，わたしはそれらの中に——神が証人である——モイゼの宗教というよりもむしろキリスト教を見たのである。そこには三位一体の玄義があり，そこには御言葉の受肉があり，そこには救い主の神性がある。原罪について，キリストを通しての贖罪について，天上のイエルザレムについて，悪魔たちの墜落について，天使たちの聖秩について，煉獄について，地獄の罰について，わたしたちが毎日，パウロやディオニュシオスにおいて，ヒエロニムスやアウグスティヌスにおいて読むのと同じことを，わたしはそこに読んだ。だが哲学に関することにおいて，あなたはまったくピュタゴラスやプラトーンを聞く思いがするであろう。かれらの原理はかくもキリスト教の信仰に近い関係にあるので，わたしたちのアウグスティヌスは，プラトーン主義者たちの書物がかれの手に入ったことで，神に限りない感謝をしている[85]。結局のところ，かれらが身を隠すかたすみさえも残されていないほどに，カバラ主義者たちの書物によって反駁され否認されえない論争など，わたしたちとヘブライ人たちとの間には，いかなることについてもほとんどないのである。わたしにはこのことのきわめて重要な証人として，非常に博識な人物アントーニオ・クローニコがいる。わたしがかれの家で会食に列席していた折り，この学問の熟達者であるヘブライ人ダクテュルスが三位一体についてのキリスト教徒たちの見解にまったく同意するのを，かれはその耳で聞いたのである。

だがわたしの討論の諸題目を検討することに話をもどすとして，わたしはまたオルペウスやゾロアストラの詩の解釈についてのわたし自身の見解を提示した。オルペウスはギリシア人たちのもとではほとんど完全に読まれ，ゾロアストラはかれらのもとでは一部欠けており，カルデア人たちのもとではより完全に読まれる。両者とも，古代の知恵の父にして創始者であると

85) Cf. *Confessions*, viii, 2.（フォーブズの注）

信じられている。すなわち，プラトーン主義者たちによってしばしば言及され，しかもつねに最高の尊敬なしではなかったゾロアストラについて黙するとしても，カルキスのイアンブリコスの書くところによれば，ピュタゴラスはオルペウス的神学を，あたかもそれにならって自分の哲学を形成した模範のごときものとみなした[86]。いやそればかりか，ただオルペウスの諸原理から流れ出たがゆえに，ピュタゴラスの格言は聖なるものと呼ばれると言われている。また数の秘密の教理，そしてギリシア哲学がもった偉大で崇高なものはすべて，最初の泉からのように，そこから流れ出たと言われている。だが（それが昔の神学者たちの習慣であったように）オルペウスは自分の教義の玄義を，寓話のおおいで包み，誰かがそれを読むとしても，その讃歌を，おとぎ話やまったくの冗談以外にその下に何もないと信じるように，詩的なヴェールでおおい隠したのである。謎のもくろまれた難問から，寓話の隠れ場から，秘密の哲学の隠れている意味を引き出すことは，ことに，かくも重要な，かくも隠されたまた探索されていない事柄において，他の解釈者たちのいかなる労働によっても勤勉によっても何ら助けられることなくそうすることは，わたしにとってどんな労苦であったか，どんな困難であったかを知ってもらうために，わたしはこうしたことを言いたかったのである。それでもなおわたしの犬たちは，わたしが数をひけらかすために何か些細で愚にもつかぬことを積み重ねたと吠え立てたのである。あたかもそれらが，主要な学派がそれらに関して激しく争っている，きわめてあいまいで議論の余地のある問題のすべてではないかのように。あたかも，わたしにかみつき，自分のことを哲学者たちの中の第一人者と信じている人たち自身によっては，まったく知られておらず試みられてもいない多くのことを，わたしが提起しなかったかのように。いやそれどころか，わたしはそうした過ちからかくも遠く隔たっているからこそ，できるだけわずかな題目に討論をまとめるように心を配ったのである。もしわたしがみずから——他のひとびとが習わしとしているように——その討論をその諸部分に分割し，切り裂こうと望んだとするならば，それは確かに無数の数になったであろう。

そしてその他のことについては黙しているとしても，900の中のただひとつの命題，すなわちプラトーンとアリストテレースの哲学を和解させるというただひとつの命題をわたしが，いたずらに数の多いことを求めているというあらゆる疑いを別にして，これら二人の哲学者をそれらに関してあるひとびとは相違しているとみなし，わたしは一致しているとみなすあらゆる主題を個々別々に数えあげることによって，それ以上とは言わないまでも，600の題目へと発展させえたということを，知らない者が誰かいるのだろうか。だがわたしは確かに語らなければなるまい——実際，つつましくもなければ，わたしの気質にも添わないけれども。それにもかかわらずわたしは語らなければなるまい，嫉妬する者たちや中傷する者たちがわたしを強いて語らせるからである。すなわち，わたしが多くのことを知っているというよりは，多くのひとびとが知らないことをわたしが知っているということを，わたしはこのわたしの会合によって示したいと思った，と。こうしたことがあなた方に，きわめて尊敬すべき師父たちよ，今や事実そのものによって明らかとなるように，わたしの演説があなた方の欲求を，きわめて優れた博士たちよ，もはやこれ以上はばむことがないように——わたしはあなた方が戦闘を待ち望んですっかり身じたくをととのえ，大いなる楽しみなしでいない様を認めている——（幸福と祝福のあらんことを）あたかもラッパによって呼びうながされているように，いざ戦いを交えるとしよう。

86) Jamblichus, *Vita Pythagoras*, XXVIII, 145.

訳者あとがき

以上はルネサンスの調和（Concordia）の君主と言われたジョヴァンニ・ピーコ・デッラ・ミランドラ

Giovanni Pico della Mirandola (1463–1494年) の最も有名な著作『人間の尊厳についての演説』Oratio De Hominis Dignitate の翻訳である。テクストは，次の著作集に収録されているものを使用した。

1) Giovanni Pico della Mirandola・Gian Francesco Pico : *Opera Omnia (1557–1573)*, Tomus I, Con una introduzione di Cesare Vasoli, Hildesheim, Georg Olms Verlagsbuchhandlung, 1969 (Reprografischer Nachdruck der Ausgabe 1557).

2) Joannes Picus Mirandulanus : *Opera Omnia*, Con una premessa di Eugenio Garin, Tomus Primus, Scripta in Editione Basilensi Anno MDLXXII Collecta, Torino, Bottega d'Erasmo, 1971.

3) G. Pico della Mirandola : *De Hominis Dignitate, Heptaplus, De Ente et Uno, e Scritti Vari*, A cura di Eugenio Garin, Firenze, Vallecchi Editore, 1942.

ことに 3) のガレン監修版のテクストを中心的な底本として用いた。なお参照した近代語訳は，上記 3) に付されたガレンのイタリア語訳の外に，次の本所収のものがある。

4) Pico della Mirandola : *On the Dignity of Man, and Other Works*, Indianapolis・New York, The Bobbs-Merrill Company, Inc., 1965.

5) Petrarca・Valla・Ficino・Pico・Pomponazzi・Vives : *The Renaissance Philosophy of Man*, Selections in translation, edited by E. Cassirer・P. O. Kristeller・J. H. Randall, Jr., Chicago & London, The University of Chicago Press, 1965.

6) Giovanni Semprini : *La Filosofia di Pico della Mirandola*, Milano, Libreria Lombarda, 1936.

7) Giovanni Pico della Mirandola : *La Dignità dell'Uomo*, A cura di Fabio Sante Pignagnoli, Seconda edizione, Bologna, Edizioni Scolastiche Pàtron, 1970.

注は，上記の3)を「ガレンの注」，4)を「ウォリスの注」(訳注者が Charles Glenn Wallis であるゆえ)，5) を「フォーブズの注」(訳注者が Elizabeth Livermore Forbes であるゆえ)，7)を「ピニャニョーリの注」と呼称して記した〔なお 6) には注が付されてない〕。ただし複数の人が同一事項を注記している時には，注者の名を記さなかった。

本著の表題について P. O. クリステラーは次のように言っている，「『演説』はピーコの死後にのみ印刷された。そのときかれの甥のジャン・フランチェースコは，かれの叔父の著作集の遺稿版の中にその『演説』を含めた。『演説』，特にその最初の部分が有名になった後，その後の版の若干が，『演説』という簡単な原題に，『人間の尊厳について』という今親しまれている言葉をつけ加えた」(Introduction to Giovanni Pico della Mirandola by Paul Oskar Kristeller, in *The Renaissance Philosophy of Man*, p. 218).

本著が書かれた時期は，恐らく 1486 年であったと思われる (P. O. Kristeller : *ibid.*, p. 217. E. Garin : *Giovanni Pico della Mirandola, Vita e Dottrina*, Firenze, 1937, p. 30)。エウジェーニオ・ガレンによれば，「『演説』のいくつかの文章と立論は，1486年10月15日付でペルージアから，アンドレーア・コールネオ・ディ・ウルビーノ宛に書いた手紙の中に現われる」(Introduzione da Eugenio Garin a G. Pico della Mirandola : *De Hominis Dignitate, Heptaplus, De Ente et Uno, e Scritti Vari*, p. 20)。われわれが翻訳した『演説』の決定稿以前にも，ピーコはもっとずっと短い草稿をしたためて，かれの親友のジローラモ・ベニヴィエーニに送っていた。この最初の草稿，および二つの草稿の比較等については，次を参照されたい。E. Garin : "La Prima Redazione dell' 《Oratio de Hominis Dignitate》," in *La Cultura Filosofica del Rinascimento Italiano, Ricerche e Documenti*, Firenze, 1961, pp. 231 e segg.